

## 11. 知識から行動への壁、行動への動機

自然災害から逃れるには避難するということが大事なことでありますが、その避難はどこに、どの段階ではじめるのかが極めて大事なことになります。その場合にはさまざまな情報を確認してからあるいは先を予見して早めに避難するというのもあるでしょうが、災害は多くの場合に突発的なことが多く、行動することが難しいのです。というのは、避難するということはある意味で、面倒なことですし、さまざまに先を考えてしまうとぎりぎりまで待つ、うまくいけば避難することが無いかもしれないと思うのは当然なことです。いくら知識で理解していても、訓練で経験してもすぐに行動に移すには、一呼吸あるものです。それは、周りを見ながら先にならないようにとか、まだ時間があるだろうと構えたり、避難所生活が面倒だったり、あるいは人の世話になることを忌避したりとさまざまな理由があると思います。

避難といっても、避難所にいくだけではなく、自宅や近くの知人を頼ることもあってよいし、災害の種類や状況、時間帯では移動しないことが安全であることもあります。つまり、その時々での適切な判断が必要になるというわけで、普段の知識を応用することが、大げさに言えば、試されることにもなります。個人的には難しくても近隣の人や地域で話し合える環境があれば、さまざまな方法がその場にあったものが案出できます。知識はあるが、実際の現場でどうすればよいのかわからないとなると、意味がありませんので、知識をベースにしたシミュレーションを訓練などで繰り返すようにしておくことが望ましいと思います。

つまり、共助の土壌を豊かにすることが望ましいわけで、防災に限らず地域情報は共有しておくようにしておきたいと思います。些細なことで顔見知りになっておくだけでも、災害時にはお互いに助けられます。何事も社会基盤やライフラインへの過剰な依存や期待があったりすると、いざというときに共助はむずかしくなるように思われます。

講習会などでは、災害時の行政の限界を知った上で、ハザードマップを用いた地域の災害リスクを理解してもらうことは、効果があると思います。出来れば、地域を越えて、学校教育にも広げていただくと、地域の全世代が同じ危機意識を持つことになるのではないのでしょうか。要は、知識も大事ですが、それをいかに応用するかの基本形を持っておかないと、応用問題ができなくなるということだと思います。

知識を使いこなすことは、言うは易く行うはむずかしいことで、これが失敗や達成の経験をしていればそれなりです。しかし、世代は交代し、社会構造も変わっていく

中で、避難時の適切な判断の期待はむずかしいと思います。可能な限り、日常生活の中で普遍化し、災害時に結果は予知できた、当然〇〇をすべきだったとならないことが大切です。